

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日
平成三十一年一月一日
（特別授承誌第六二七号）
（第百二十二卷第一号）

ホトトギス

一月号



急 告

ホトトギス社

本来なら稲畑廣太郎主宰の「風雅の小筈」のコーナーですが、読者の皆様に緊急にお伝えしなければならぬ事態が起りましたので、この場を借りて謹んでご報告申し上げます。

去る平成三十年十一月二十四日未明、稲畑汀子名誉主宰におかれましては突然心臓発作に襲われ、救急搬送されました。幸い一命は取り留め、この号の出る頃には退院して自宅での療養を行っている可能性が高く、日常生活に支障はないものと思われまます。

その後十一月二十九日に病院でのカテーテル検査の結果、この症状はストレスによるもので、退院後は日常生活に全く差し支えないものという事でございますのでどうぞご安心下さいませ。

ただ、お詫びしなければなりませんのは、平成三十一年三月号の「天地有情」の選句につきましては、折角ご投句頂いておりますが、とても選句が間に合いません。この号につきましては休載とさせて頂きます事、謹んでお詫び申し上げます。四月号以降も様子を見ながらになります事、投句用紙は添付致します。状況は出来るだけ皆様にお伝えして行きたいと思っておりますが、先ずは現時点の状況をご報告申し上げます。

皆様には大変ご迷惑をお掛けしてお詫びの言葉もございませんが、今後共稲畑廣太郎主宰を中心に誠心誠意励んで参りたいと存じますので、読者の皆様におかれましては、尚一層のご支援を賜りたく、ここに伏してお願ひ申し上げます。

旬日記 汀子

平成三十年一月六日 菅屋ホトギス会

六甲の風花消息のあるところかな
悴みて聞く心が通り過ぎてより
買初の心が通り過ぎてより
野は生きる力を秘めて冬の草

一月七日 下萌旬会

三ヶ日とはあつけなく忙しく
乗初やハンドルさばきおごりなく
誕生日祝はれしより年賀かな
稿債も簡単に年越しにけり

一月八日 ロイヤル俳壇

改る年賀の心ととのへり
風花や六甲仰ぐとき光る
彼彼女年賀の心行き交へり
幾度も逢へて年賀の心なほ

お降といへぬ八日でありしこと
はや十日正月気分あるままに

一月九日 大阪倶楽部

覚えたる一枚迷しうたかるた
早梅に風荒き日となりにけり
他人事の如く年とる松の内
探し物出て来し安堵松の内

心行き届く配慮も松の内
初旬会いつもの如くありしこと

一月九日 綿業倶楽部

双六や一人天下をとりしこと
初夢を忘れしことにしてをりぬ
お雑煮を祝ふ家族の揃ひけり
双六や一足早く旅に出る

寄道のなき双六のつまらなく
一月十一日 清交社
家族皆揃ふ日のあり初明り

待つ心どこかにありて雪の朝
覚悟とはあつてなきもの寒に入る
六甲の雪に規制のある山路
つながりし電話が告げてをりし雪

寒の入らしき風音聞く目覚
新年のホテルの駐車場満車

一月十二日 工業倶楽部

雪の皷一ありしと聞くも朝のこと
又元の一人となりて寒に入る
一月十三日 偲ぶ初旬会
初富士に言葉貧しく対しけり

富士を見て寒さ忘れてをりにけり
一点の雲なき雪の富士とこそ

一月十四日 第二旬会

雪の地へ帰る旅路の無事祈る
暖かき日を近づけて旅の歸路
初旅を終へ走り出すスケジュール
一月十六日 有恒俳旬会
初旅を終へ日常の動き出す

年賀述べ終へいつもの顔となる
袖子の香の葉子に新年祝はるる

寒牡丹咲き継ぐ日数ありにけり
走り出す月日正月はや半ば

幾度も述べし御慶でありしかな
一月十六日 無名会

寒月には祈る心のありにけり
乗初はいつもの道でありにけり
祈ること多しこの世の正月も

心配はしていらぬと乗初す
昨日逢ひ今日又逢ひて初旬会
一月十七日 夏潮旬会

震災のその後の日々福寿草
水音に安心感のあるとんど
空模様とんどに火入れはじまりし
雨上りとんど日和と申すべし

とんど焚く奉行の助手をつとめけり
焼詣の配らやれ四日目の旅歸り

一月十九日 アネモネ旬会

潮の香の風にも乗りて野水仙
見舞はれて見舞ひて寒の内なりし
黄水仙 籠に溢るる志

寒見舞とは言はれたくなき寒見舞
米寿とは言はれたくなき寒見舞

一月二十五日 きさらぎ会

見慣れたる景 改る初明り
年玉を用意する身を樂しみて
追はれたる仕事寒さのなかりけり
快晴の富士見しというふお年玉

刻々の富士山頂の初明り
ただ祈るほかなきとても初明り

一月二十六日 時雨旬会

寒月の瘦せゆくばかり旅にあり
もの忘れせしこと忘れたる寒さ
寒月の澄めば空気の新しく

雪降りしその後解ける日々いくつ
ふたたび雪の解けざる東京に

寒椿咲き倦むことのならけり

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年一月四日 カトリック新聞選者吟

新婚の吾娘の祈りやクリスマス

一月六日 菅屋ホトギス会

悴むや星野仙一逝かれしと

冬の草一と震へして色放つ

鬪將の逝きて風花消えにけり

句座和む春著の佳人現るるより

一月七日 野分会声屋例会

仇討の世を遠くして初芝居

寒梅を遺し鬪將逝かれけり

幕の内光し豪華に初芝居

太陽に光貰ひし冬の梅

一月七日 青風会声屋例会

初富士を車窓に嵌めて里帰り

初富士の白く明けゆく仔細かな

ラガーの手泥を掴んでをりにけり

六十の目が追ふ楢円ラガーかな

初富士や新幹線の玻璃染めて

一月八日 朝日カルチャー若草句会

君だけが狙はれてゐる雪礫

寒の水音にも艶のありにけり

雪礫富士を背に投げてをり

寒の水含み命の鼓動聞く

獅子舞に路地の躍つてをりにけり

一月十日 「冬野」 一千百号合同句集

一世紀目指し百万本の薔薇

一月十日 土筆会

春隣嫁に行きたる娘の未来

春隣風と日差の鬪ぎ合ひ

鳴は群れ鷺は孤高を守り抜く

蓬萊を掛ければ訪ねくる人
水仙や下田の旅を目前に
一月十三日 高濱年尾先生を偲ぶ初句会

眠る山見下し富士の天を突く

蒼天を白く染め上げ雪の富士

漱石の恙冷たく語る塀

川普請指呼に葉流さん夜湯かな

凍星を吸ひ上げてゆく足湯かな

寒灯の赤く潤みて美酒進む

霜の声ロシア正教会の黙

一月十四日 年寿会

冬ぬくしガイドは屋のシャンデリア

冬うら見たいもんみな見えました

春を待つ維新を知らぬ龍馬の目

稜線を吊り上げてゐる寒の空

寒風に弁天島は過去閉ざす

臘梅の香の滑り落つ斜面かな

一月十六日 北國文芸選者吟

瑕瑾無き空初富士の画布として

一月十七日 蕪心会

故郷の便り凍雲運び来る

船音の寒の音階奏でをり

寒の川スクリュウ音に目覚めゆく

故郷の地震の記憶や寒灯

山茶花や三角池を眠らせず

凍雲にへりコプターの音弾け

ロケットのやうな水上バス寒し

一月十八日 登高会

継続といふ言の葉も去年今年

若水を汲めば日差の張り付いて

若水の湯気纏ひつつ汲まれけり

丸四角汁にも雑煮談義かな

一月十九日 「河内野」 新年句会

読初は新主宰誕生の記事
初刷や新主宰てふ文字躍る

初明り君の未来を拓きゆく

恵方道新主宰祝ぐ宴へと

初風へ漕ぎ出してゆく新主宰

一月二十一日 野分会東京例会

蒼天の奈落に楚々と冬の梅

寒梅に名園の空明け渡す

恋心ほど寒梅の数となる

一月二十一日 青風会東京例会

寒の塔叩けば曲を奏でさう

寒雀地球の裏を探るかに

水仙に旅の記憶といふ香り

枯芝にキヤッチボールの距離伸ばし

気もそぞろ新年会の前の句座

一月二十三日 若水句会

宮殿のやうな本堂冬うらら

白銀を濁らせてゆく冬日かな

雪女郎首都を虜にしてしまふ

羅終へし築地市場に北風荒ぶ

一月二十四日 目黒学園句会

水餅の水に濁りのなかりけり

水餅に家訓の生きてをりにけり

水餅を掬ふ手先の赤さかな

俳諧の端に遊びて去年今年

大餅や天の気紛れ首部真白

水餅の罐にも味を秘めてをり

一月二十六日 梅花祭選者吟

白梅に忌心ほどの紅添へて

一月三十日 むさし野吟行会

寒牡丹園の要として孤独

名園の雪吊といふ匠かな

声も艶めく名園の寒鴉

雑詠 廣太郎 選

尺玉を膝に花火師花火見る 神戸 後藤比奈夫
 消ゆることそれも演出揚花火 同 同
 花火にはある儂げといふ美学 同 同
 城山はデイトスポット落し文 徳島 岩田公次
 箱庭の空釣人の竿の上 同 同
 炎天を憑かれしごとく遍路来る 同 同
 阿波踊路地の明るさ暗さ抜け 龍ヶ崎 今橋眞理子
 山際の際の際まで星月夜 同 同
 ふるさとの空真二つに分け銀河 同 同
 騒ぎたる記憶閉ぢこめ蚊帳の果 京都 山崎貴子
 里山に蚊帳の別れといふけぢめ 同 同
 平屋なることも懐かし蚊帳の果 同 同
 踊の輪大きく歪み郡上の夜 渋川 木暮陶句郎
 目の端に君置き郡上踊かな 同 同
 闇蒼し郡上踊の果ててより 同 同
 いつしかに里となる家新豆腐 神戸 山田佳乃
 手をつなぐ父の日焼と子の日焼 同 同
 金風の撫でれば波の立ち上がる 同 同

右神戸左芦屋の虫の声 東京 大久傑白村
 高原にきて新涼の周波数 同 同
 新涼やロード終へたる甲子園 同 同
 昨日今日根岸の話出る九月 同 田丸千種
 三平も子規も根岸の秋の声 同 同
 曼茶羅の絵解き夜長のつれづれに 同 同
 北斗星より新涼のひとしづく 神戸 藤井啓子
 雨三日蚊帳の別れとなりけり 同 同
 子規の濃き三十五年鶏頭花 同 同
 山茶花に今日の終つてゆく濁り 東京 今井肖子
 ストープの冷たく並べられ売られ 同 同
 冬空へ缶蹴つてひたすら走る 同 同
 胡弓の音誘ふ女の辻踊 神戸 和田華凜
 言の葉を継ぎ足すあはひ秋扇 同 同
 鮎落つる月の美しき里泊り 同 同
 台風に備へし無駄をくどくどと 福山 竹下陶子
 宇宙人考へ眠るハンモック 同 同
 新涼の音を踏みぬしハイヒール 同 同
 草々の秋めく音となりけり 東京 橋本くに彦
 昼酒に酔芙蓉より先に酔ふ 同 同
 プロペラの唸る秋天エアリース 同 同
 海の青窓いつぱいの夏館 神戸 涌羅由美
 かなかなや寂寥の風奏でつつ 同 同
 野仏に供華となりゆく秋の蝶 同 同

雑詠句評（十二月号より）

出張へ涼しき笑顔送りしに 西宮 本郷 桂子

出張先で、何か事件にでも遭遇されたのであろうか。あるいは……と、様々なことが想像される。「送りしに」すなわち「送ったのに」というのだから、不安な想像である。

何があったとは述べておられない。ただ作者の心情というその一点に絞られている。これもまた写生であろう。作者の心情を生されたのである。そこに物語は不用なのだ。（霜衣）

実は作者は御身内が出張に行かれて、その出張先で急に亡くかられてしまったのである。そのお悲しみの中でも淡々と句に詠まれているところに作者の優しさと強さを感じるのである。しかもそういった状況の中で、何と「涼し」という季節を詠まれているところに一層悲しみを感じる。（廣太郎）

重力をとり戻したる海女の足 神戸 山田 佳乃

海水に浮き沈みして貝や海藻などをとっている海女さんには、重力の作用が全くないように見えたので心配だった。しかし海女さんが、いま海中に立ち上がったのを見て「重力をとり戻した」ことに安心したのである。重力を媒介に、人の動きを巧みに詠んでいる。（仁義）

プロの海女の方が、一回の息継ぎでどの位の時間海に潜っているのかという事を計っているテレビ番組を見た記憶があり、結構予想もしていない程長時間であったという記憶がある。その海に潜っている時間を経て陸に上がった時の様子がユニークに捉えられていて実感として伝わってくる。（廣太郎）

天地有情

又一人春の闇へと連れられて
もう会へぬ人みよし野の春の闇
みちのくの旅新涼にはじまりし
翁の跡慕ひきし旅秋涼し
迎鐘俸のために撞きたけれど
走馬燈廻る仏間に一家族
窓越しの音のみ流る遠火花
火花とて飛び出す人の今は亡く
万緑を歩いてゐても偲ぶ人
老生きてをり万緑に力得て
いのち大事と片陰をたどりゆく
詩人みなふるさとを恋ふ夜の秋
父の忌も母の忌も過ぎ天の川
銀河見にモンゴルへ旅して来しと
長寿とは美しきこと千日紅
秋の蝶風にさらはれやすき色
天童の大朝霧に着けるバス
山寺に秋の声聞く一日旅

東京 稲畑廣太郎
同
長岡 安原 葉
同
神戸 後藤比奈夫
同
東京 河野昭彦
同
相模原 木村享史
同
熊本 岩岡中正
同
東京 今井千鶴子
同
神戸 和田華凜
同
仙台 赤川誓城
同

家中が残暑に負けて犬までも
母の忌を修し八月終りけり
のぞきこむ路地の寒さでありにけり
青空や落葉溜りに日の当る
崩れたる跡のあらはに夏の山
夏山に海望みつつ憩ひけり
伝統の川に千羽の鴨の来し
信心のごとく下萌してをりぬ
弟の住むふるさとよ赤のまま
来し方を刻む面輪の涼しさに
生と死の間を行き来する霧よ
露の天そこまで下りて来てゐたり
夕立や妻と二人で軒を借る
この出水抑へるすべもなく憎し
朝顔は好きで早起き苦手なる
新涼の空を大きく使ふ雲
風の盆町ごと崩れさうな人
風よりも土の知らせてゆきし秋

東京 山田閏子
同
同 今井肖子
同
同 大久保白村
同
福山 竹下陶子
同
神戸 千原叡子
同
群馬 中杉隆世
同
神戸 浜崎素粒子
同
龍ヶ崎 今橋眞理子
同
金沢 藤浦昭代

金子選